



特集 不妊・妊孕性  
生涯にわたり子どもを得る能力への支援

# 2

## 女性の 一生の健康支援のために —女性の妊孕性に関連する卵巣予備能の知識—

浅田義正

医療法人 浅田レディースクリニック 理事長, 浅田レディース名古屋駅前クリニック 院長, 浅田レディース勝川クリニック 院長

### POINT

- ① 不妊患者に多い誤解とは？ 卵子の老化とは？
- ② 妊孕性（妊娠しやすさ）は年齢の影響を大きく受けます！
- ③ AMH（アンチミュラーリアンホルモン）が注目されています！



### はじめに

医療者として不妊患者と向き合うとき、どこでボタンを掛け間違えたかと思うほど違和感があり、話が通じないことがあります。それは次のように患者が誤解しているからです。

- 月経があるうちは妊娠可能
- 月経が始まってから卵子はできてくる

- いくつになっても妊娠率・流産率は変わらない
- 自分の努力次第で妊娠は何とかなる
- 体外受精は万能で、やりさえすれば誰でも妊娠できる

これらがすべて間違いであることは医療者には明白ですが、多くの不妊

患者・女性は本当にこう思っています。そう信じている患者をそのまま受け入れるわけにはいきません。浅田クリニック（以下、当院）ではこのような認識の間違いを正すため、受診前から説明会を実施し、「卵子について」「卵巣予備能」について話をしています。

## どうして生殖を誤解しているのか

結婚適齢期、高年初産婦という言葉はかつてよく使われましたが、現在ではほとんど死語になってしまいました。仕事優先で、落ち着いたら結婚、妊娠、出産という考え方が主流になっています。日本経済の発展の陰で、男女の生殖における役割の違いが軽視され、

男女平等がより強調され続けた結果ではないでしょうか。

少子高齢化、非婚化、晩婚化、晩産化など社会の変化が急激に進行しています。最近は少し変わってきましたが、女性週刊誌には「若さは保てる」「いつでも結婚できる」「いつでも

妊娠できる」といった女性受けする記事・論調が目立っていました。マスコミ報道から自分にとって都合の良い情報だけをインプットし続けた結果、「はじめに」で挙げたような認識に至ったのではないかと思われます。



## 不妊治療患者の高齢化

さまざまな変化の結果、不妊治療も大きな影響を受けています。最近の不妊外来の現場では驚くことに、**40歳を超えた患者が30～40%**もいます。

したがって、原因を究明する不妊治療から、原因ははっきりしないがあえていえば、加齢が要因の患者が激増し

ています。年々初診患者の平均年齢は上がり続けていますが、この2～3年がとくに顕著です。高齢不妊患者は妊娠しにくいだけでなく、妊娠しても流産率が高く、妊娠経過が順調であっても、ハイリスク妊娠・分娩の予備軍となります。不妊治療の最大の副作用が

体に最も負担のかかる妊娠であり、安全な妊娠経過、分娩、育児などを考慮し、不妊治療するかどうか検討されなければならぬといふも患者には説明されています。高齢者の不妊治療をどこまで受け入れるのか、多くの問題が浮上してきていると思われます。

## 卵子老化の衝撃

2012年2月バレンタインデーのNHKクローズアップ現代で「産みたいのに産めない～卵子老化の衝撃～」というタイトルで卵子の話が紹介されました。年齢とともに原始卵胞が老化し減少することは医療者にはよく知られていることで、いまさらという感もなくはないですが、正しい事実を世に伝えていただいたいことを感謝しています。

ここに注目!

### 加齢と流産

流産率は一般的に10～15%とされていることが多いですが、年齢とともに流産率が上昇することは意外に一般の方に知られていません。35歳ぐらいで約30%、40歳で約50%、統計的には43歳ぐらいで妊娠してもほとんど流産となります。しかし、限界には個人差があります。当院の最高齢の妊娠は47歳ですが流産しています。最高齢の出産は46歳で3例ありました。30代後半から40代での出産が多くなった現在では、反復流産・習慣流産・不育症についてその概念・根拠が揺らいでいます。誤解を生まないためにも、少なくとも年齢規定を設けなければいけないと思っています。